

鐘（寿國太夫曲）

へ高砂や尾上の松は相生の姿いろどるばんしきの名勝はるか
にひびき灘 合

へ山僧静かになんちようを説けば 落花しきりに晚鐘に舞う 合
へ墨染めの衣に燃ゆる紅の腰箕揺るる仇心隠す塗り笠ぬりは
きて 無常ふししょうの音と共に 阿国が歌舞伎の所作はじめ 合
念仏踊りのなまめかし

へ会えば又逢う日を想う 身は無理も優しと叩く手洗いの鉢
に夢幻の鐘を聞くみどりのとばり奥深く 枕に通う鐘の声 暁
は 別れの恨み更くる夜の 鐘にかたしく涙雨

へ大津絵の筆の始めは何仏 鬼が念仏鐘叩く 金棒引くやら提灯
と 鐘を一荷に急ぎ足 エエ我も 遅れはせじと妻よびに 取りつ
く 鐘撞くそりやつれた 釣れた醜女の深情け なくれなくれて破
れ衣 五欲を釣り鐘思いきや 煩惱の犬につかれし色法師

へ絆に宿る猛襲に 合 いっしか大蛇となりふりも みだれし恋
の 凄まじく 思えばこの鐘 恨めしやとて吐く息は 業火となっ
て炎々と 合 へ夜空に鐘はとけてゆく 夜空に鐘はとけてゆく
へ遠き世の鐘 数々の語り草 見果てぬ夢を今宵又 空に声あり

玲瓏と 愛の鐘住む 星月夜 後弾き